

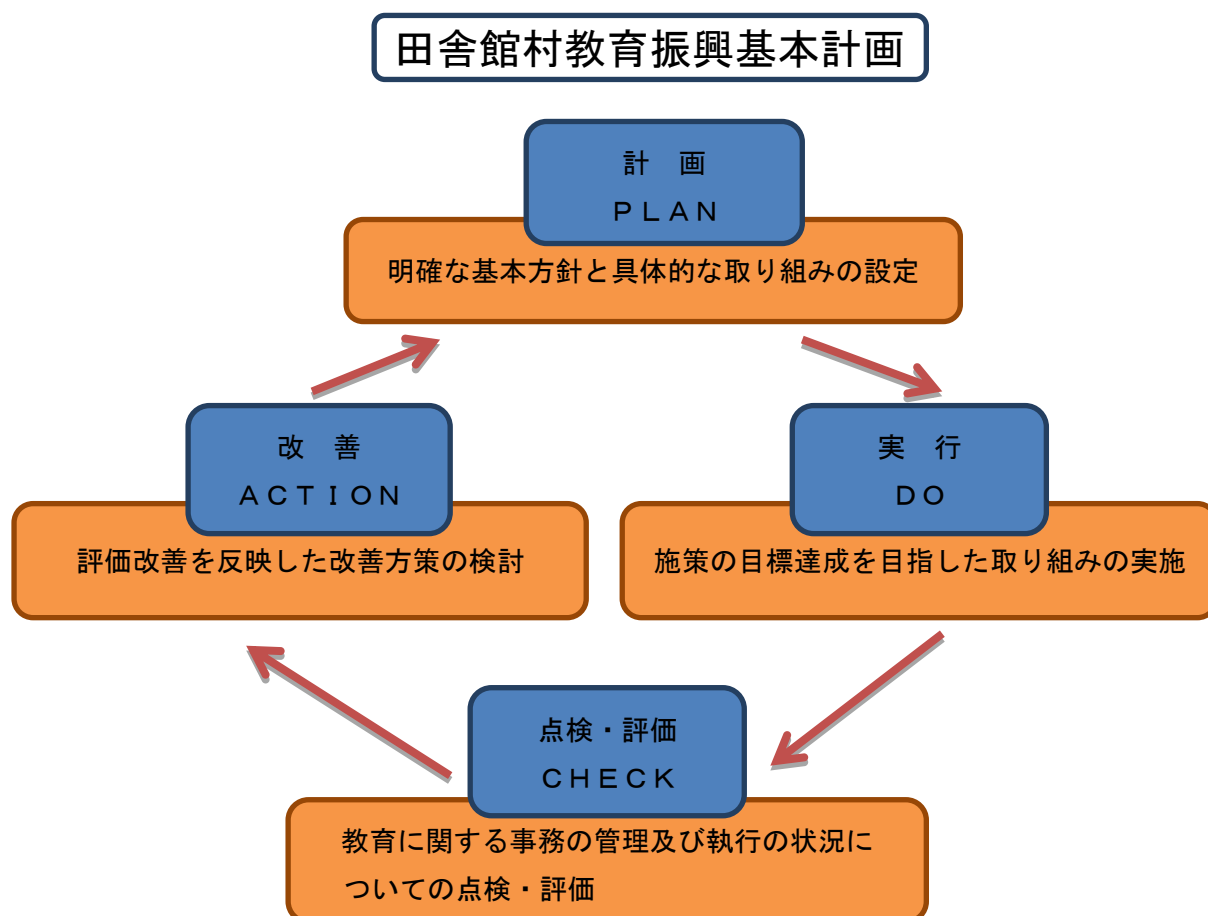
第6章 教育振興基本計画の推進

第1節 進捗状況の管理・改善

田舎館村が目指す教育を描いた「田舎館村教育振興基本計画」を推進する際に、まず目標を設定し、その施策を実現できるように取り組むとともに、毎年度に実績や課題、目的達成状況、さらには今後の方策などを評価・検証し、次年度の施策の取り組みに生かすPDCAサイクルなどの手法を効果的に活用していきます。

また、学校教育や社会教育の達成状況は、毎年度、実施されている「教育委員会の事務の点検及び評価に関する報告書【事業実績】」や田舎館小学校と田舎館中学校で実施している「学校評価の集計結果」を参考にしています。そのほかに、学校の研究授業で行っている「事前アンケート」なども参考にしています。そうすることで、教職員や児童生徒、保護者の思いや考え、村民の意向などを的確に把握しながら改善を進めていくことができると考えます。

一方では、最近の急速な社会情勢の変化などに対応するため、設定した施策などについての見直しや新たな取り組みの展開など、計画の柔軟性を持つことが必要であり、そのためにも着実な進捗管理と柔軟な計画の改善を行っていきます。



第2節 評価方法と見直し

1 各年の対応

この計画に揚げた19の基本施策については、「田舎館村教育委員会の事務の点検及び評価に関する報告書」、「田舎館小学校の学校評価」、「田舎館中学校の学校評価」を中心に、学校教職員、児童生徒、保護者及び村民の意見をより広く反映させ、全体的な視野で自己点検・評価を行っています。

その際、社会情勢の変化と児童生徒の実態及び保護者の考え方を配慮し、迅速かつ柔軟に対応しながら基本計画の見直しを進めていきます。

2 計画期間の柔軟性

この計画期間については10年間とみていますが、最近の教育に関する考え方が社会の変化によって目まぐるしく変わることも予想されることから、計画期間の1/2の5年間で中間見直しの時期と考えていくことも肝要と考えられます。

また、国の教育政策や県の教育計画の変化にも対応することが必要であると考えられることから、その年度の教育施策を村の教育計画にどのように反映されていけば良いかということを、社会情勢の動きから判断していくことも大切になってきます。

例えば、人工知能（AI）によって、社会科や理科、数学、算数に対する考え方や、指導内容、指導方法などでも変わり得ることは十分ありうると考えることができます。一例として、多くの工場ではほとんどロボットが作業を担っています。農業も今では機械化作業となっています。

その他、これからは自動車の運転は運転士を必要としない時代に入ろうとしています。加えて、自動車そのものがドローン開発によって、まったく異なった乗り物になっていくことも予想されます。

このことから、これからの教育は、そのような社会に対応した教育内容になっていくということを意識しながら進めていくことも必要となってくる時代に、既に突入しているのかもしれません。

村民が、この社会の中で何を学び、何を感じ取り、生活の中にその知識や知恵をどう生かせばよいのか、その指針を打ち出すことを見逃してはいけないということを、忘れてはならないでしょう。

すなわち、計画期間については、柔軟性を持たせるとともに、かつ、常に時代を見極めながら進めていくことが大切になってくるのです。